
門閤家の番犬事情

ゆさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

門間家の番犬事情

【Nコード】

N0768Z

【作者名】

ゆさ

【あらすじ】

魔法は電腦空間に移され、誰もが携帯電話やノートパソコンを持つ時代。

ジャポンに住む門間家は、ハイテク機器に囲まれた生活よりもスロ―ライフを好む貧乏一家だ。

有名な魔法使いを先祖に持ち、電子辞書よりも辞書、携帯電話よりも魔道書と昔懐かしい手法を好む母は、その教えを忠実に守っている。

ある日、僕は、押入れのダンボールの中から古びた一冊の本を見つ

ける。

それが、はじまりだった。

気が向くままの不定期更新です。一話分がとても短いです。

*警告タグは、意思表示です。

序

時は並成、世界魔法大戦より百数十年後。

大戦に大敗を喫し、勝利国の統治下に置かれたジャポンは統治総司令部の下、国一丸となって復興に励んだ。

数年後、勝利国の統治総司令部も引き上げ、ジャポンは自立の道を歩みだし、高度成長期に入った。

あらゆる魔法が揃うといっても過言ではないジャポンは、国の方針のもと、新たな魔法の研究に乗り出す。

しかし、新たな魔法というものの定義が定まらず、研究者達が研究を止めようとしていた時、ある一組の研究チームが提唱した理論が話題になる。

『魔法を、電腦空間に定着させることに成功』

研究の場は電腦空間やネットワークに移っていった。

そして、現代ジャポンの魔法は、携帯電話やノートパソコンという機器とそこに構築された魔法空間での活動が主流になっている。

僕のお家は、母子家庭です。

お母さんの口ぐせは、一ヶ月五千円生活ばんざい、です。

お父さんは、いません。

お母さんに、お父さんはどこにいるのって聞いても、ランプの中で寝ているとか、ごまごま黒ごま白ごま金ごまアザラシごま、という変な呪文を砂漠の中央で叫ばないと会うことが出来ないと言います。お父さん、正直僕は面倒なので会いたくありません。

学校は、楽しいときもあるけれど、勉強についていけないです。とくに魔法の授業は、頑張っても頑張っても、電話やパソコンの電源の入れ方が分りません。

先生もあきらめていて、僕だけいつも点数がわるいです。

お母さんは、電脳空間だけが魔法じゃないと言って励ましてくれるけど、魔法以前の問題だとおもうのです。

学校帰りは、学校の近くのちょっとした茂みで自然薯ほりです。

途中でポッキリ折れないように、優しく土を掘ります。

あと、野蒜とかも摘んで帰ります。

たまに、近所のおばさんが食べ物をお裾分けしてくれます。そういう時は、テーブルの上が豪華になって、すごく美味しいです。

「小太郎、あなたの部屋の押入れにある物を、いる物といらぬ物に分別しておいてくれないかしら。今度、海辺の野原公園でフリーマーケットがあるんですって。参加費無料なのよ、売れるかもしれないから出ることにしたわ」

「わかったー」

「では、自然薯は預かるわ。今日は頑張ったのね、偉いわよ。さあ、手を洗っていらっしやい」

「うん」

今日の収穫をお母さんに渡して、外にある水場に駆けていく。手を丁寧な濯いで土を落とし、穴掘り用に着用していたエプロンも束子で汚れを落とした。絞って水気を飛ばし、ハンガーにかけて吊るした。

「エプロン、よし。今日は長いのが採れたから、明日は野草を摘もう」

両手ではさみながら叩いて皺を伸ばした。それが終わると、自分の部屋に戻る。

「フリーマーケットだって。僕のおもちやも買ってくれる人いるのかな」

押入れから三つのダンボール箱を引っ張り出した。おもちゃは、なるべく綺麗で壊れていない物をだそう。置く時も放り投げずに、ゆっくりと手を下げて床に置いた。

「これくらいかな。こっちは洋服だから、お母さんに聞いてからにしよう」

中身だけ取り出して、畳の上に広げて置いた。取り残しはないかと、手だけでダンボール箱の中を探っていると、指先にコツンと硬質性の何かが触れる。

「本だ。お母さんの本かな、なんでこんな所にあるんだろう」

重厚な作りの表紙にトルコ石の様な青い石が散りばめられている。その石に魅せられてか、表紙を開いて数頁捲った。印刷された文字に指を這わせてなぞる。

「なんて書いてあるんだろう。あーあ、分らないや。学校もパソコンだけじゃなくて、こういう文字の勉強をさせてくれないかな」

授業に対する不満を言ってもキリがつかない。本を閉じて作業に戻ろうとしたとき、なぞった文字が淡い光を放っているのを見つけた。「わぁ、どうしよう。と、止められないかな」

淡い色から段々と強い色を帯びるようになり、やがて強烈な閃光が部屋を包んだ。

「なっ。なに、なにっ」

咄嗟に目を片手で覆い隠す。眩し過ぎて目蓋も開けられなかった。

「お母さん、お母さん、大変だよ、お母さん」

本を抱きしめて、騒がしく階段を下りた。一階の部屋を一巡りしても姿を見つけることが出来なくて、お風呂場も覗く。

「あら、どうしたの」

お母さんは、泡立てたスポンジを握って浴槽を磨いていた。

「大変なんだよ」

「小太郎、落ち着きなさい。それから、後ろにいる犬は、もといた場所に返してきなさい。家は動物を 飼う余裕が無いと言っているでしょう。使い魔でもない限り、駄目なものは駄目なのよ」

「違うんだよ、お母さん。これ、これがっ」

本を突き出して、表紙を見せる。

「まあ、この本どこにあったの？ 探していたのよ。小太郎、見つけてくれてありがとう」

手についた泡を水で洗い流し、エプロンで水気を拭くと本を受取った。

「僕の押入れ、じゃなくてっ」

「そう、小太郎の押入れね、……じゃないの？」

「ちがくて、押入れなんだけど、そうじゃないの！」

僕は一生懸命伝えたいんだけど、言葉がなかなか見つからない。

「どっちな」

「押入れのダンボール。洋服が入ってて、その一番下にあったの」

「小太郎の洋服？ 記憶に無いわねえ」

「それで、その本を触っていたら、ピカーって光りだして、あの犬が出て来たの」

文字をなぞったページを見せたくて、お母さんから本を取ろうとしたんだけど、駄目といって手が届かないようにしてしまう。高い高いって、赤ちゃんにしているみたいに。

「本から。ほんとうに？」

僕はうんうんと何度も頷いた。だって本から出てきたのは本当なんだもの。まぶしくて目を開けていられなかったけど。

お母さんは本のページを注意深く捲り始めた。目は文章を読んでいる、唇は小刻みに動いている。

「……小太郎、その犬は一匹だけかしら。あと二匹、いるなんていわないわよね」

「おお、よく分ったな。あと、兄と妹がいるのだ。なぜか分裂しているが、個別に動けるといえるのは、随分と楽だの。わしは気に入ったぞい」

「えええつ、い、犬がしゃべった！？ お母さん、しゃべったよ」
「ごつんと頭の骨に響く、ぶ厚い本の一撃を貰った。」

「痛いです」

「そうね、痛かったかもねえ。……それで、貴方のご兄弟は、今何処にいらっしゃるのかしら」

お母さんの腕の力は凄いです。細い腕なのに、どうやったらあんな力が出るのか不思議です。野球のバッターなら、ホームランを打てると思います。

「さあ、わたしには分らんう。じゃが、主殿の縁が深い場所には居ると思うぞい」

「貴方の『主』というのは、小太郎のことかしら？」

お母さんが一歩前に出て、僕を背中後に押しやるのです。僕も喋る犬と話みてくて、横から覗こうとするけど、それも手で塞いでしまつて見る事が出来ません。だけど僕はどうしても見たくて、お母さんの服を引っ張りながら……。

あれ、へんだなあ。目がまっくらになって。

「小太郎！？」

「主殿っ」

僕はどうしたんだろう。

お布団が重いな。あ、おでこに何かがのっっている。ひんやりしていて、気持ちいいや。

「小太郎、気が付いた？ 大丈夫かしら」

お母さんだ。僕のほっぺに触る手も、冷たくて気持ちいいのです。「ぼく、どうしたの……」

「魔力の枯渇で倒れたのよ。押し問答じゃなくて、はやく契約させ

るべきだったわね。ごめんなさい、私の判断ミスだわ」

「けいやく」

「そう、召喚獣との契約よ。この方も、小太郎に無条件で従うと仰られているわ」

黒い犬が、布団の上に乗っかってきた。

「主殿の魔力が枯渇したのは、わしのせいでもある。わしを人界に留めておく為に、大量の魔力を必要としている。今は此処には居らぬが兄上と妹も、主殿の魔力を使っておるでな。わしの分だけでも減らすという事で、主殿の母上の許しも得た」

「どうすればいいの……」

「なに、至極簡単。こうして額を合わせて」

お母さんが、僕の腕を動かして、口を覆う様に手を乗せた。犬は、僕の顔を跨ると、おでことおでこを合わせて、何かぶつぶつと言いつ出した。

「汝との契約を、承認する」

巨大化した犬が、手の甲をがぶりと噛んだ。

「小太郎、準備は出来た？」

「うん、出来たよ」

「それじゃあ行きましようか」

ランドセルを背負い、靴を履く。

お母さんと僕、犬も一緒に家をでた。

「主殿、具合は如何じゃ。まだ苦しいそうだな」

昨日の契約の後、お母さんに詳しく説明してもらった。

僕は、お母さんの魔導書から召喚獣を呼び出してしまったんだって。

その召喚獣の本来の性格は、とても強いけど荒々しいんだって。魔法のまの字も扱えない僕なんかじゃ、とても扱う事が出来ないレベルなんだけど、なんでか……、懐くっていうのかな、こういうの。優しくしてくれている。

魔力の枯渇で倒れた事もそうなんだけど、契約のために噛んだ右手の事だって心配してくれるんだよ。噛まれた時は痛かったけど、今はなんともないのに。

今日から毎日、右手だけでも手袋をきなさい、とお母さんに言われた。なれない手袋の違和感が気になって、ずっと触ってばかりだから、余計な心配をさせちゃっているのかな。

「お母さん、手袋は外しちゃだめなの？」

「家にいる時はいいわよ。でも、こうやって人前にいる時はいけません。特に大人の前では取ったりしては駄目よ。絶対に面倒事に巻き込まれるわ」

やっぱりダメかあ。チクチクして痒くなってきた。

「じゃ、じゃあ、他の手袋はっ。これね、チクチクしてきて痒くな
って痛くなるの」

「痒い？ ちょっと手をかして」

僕の手を取り、手袋を捲り上げて中を覗いた。

「赤くなっているわ。この生地じゃ、小太郎の肌質に合わないのか
しら。いいわ、今日学校が終わったら、新しい物を買に行きまし
よう」

「やったあ」

お母さん大好きっ。僕は嬉しくなって、スキップをして学校に行
った。

僕が通う小学校は、歩いて十分程の所にある。

学校から見たら、学校の裏手側にある住宅街の一角にある。この住宅街の小学生はみんな、裏門を通って各学年の昇降口に行く様になっている。

一応門とは言っているけど、正門の様な立派な門構えではなく、油が切れた蝶番がキシキシ音を立てる安っぽい扉だ。近くには、用務員さんの為の部屋もある。

用務員のおじさんは、悪者レスラーみたいでちょっと怖いけど、本当は良い人なんだよ。

一番に挨拶をしたくて、駆け足でおじさんのお部屋を覗いた。

「おはようございますっ」

「よう、坊主。今日も元気だな。ん？ 熱でもあるのか、顔色が悪いぞ」

「うっん、平気だよ」

「そうか？ ま、坊主がそう言うなら大丈夫なんだろうな。あまり無理はするなよ」

「うんっ。ありがとう！」

窓から身を乗り出したおじさんが、僕の頭を力いっぱい撫でてくれた。用務員さんの手は、お母さんと違って、大きくてごつごつしているけど格好良いんだ。僕もあいう手になりたいな。

「おはよう御座います。息子がいつもお世話になっているそうで」

「え？ いやいや、こちらこそ。……なんだ坊主、きょうは母ちゃんと一緒か？ 先に言えよ、驚いたじゃねえか」

ゆつくりと歩いてきたお母さんが、僕と同じ様に窓越しに挨拶をした。

おじさんはびっくりして、椅子から立ち上がってぺこぺことお辞儀をする。

髪の毛がぐしゃぐしゃになるくらい、強く撫で回された。

それから、お母さんと一緒に職員室に行って、担任の先生と少しお話をした。途中で校長室に呼ばれて、僕はすごくビクビクしていた。だって用務員のおじさんより、校長先生のほうが怖そうなんだもん。

お母さんが先生に話していたことを、もう一度校長先生に話していた。

手袋を外した右手と喋る犬を交互に見て、ふうつとため息をついた。

職員室の前でお母さんと別れて、犬と一緒に教室に行く。

お母さんはお家に帰っていった。

さっきのお話は、途中で校長先生がぶるぶる震えだして、お母さんはとてもここにこにこ笑っていた。

僕は黙って聞いていたんだけど、ジャポン語じゃない言葉だったから分らなかった。大丈夫かな、校長先生。急にお腹とかが痛くなつちやつたのかな。

「僕の席は、ここだよ。ええと、学校にいる間は、ほとんどこの椅子に座ってるからね」

「分ったぞい」

教室の黒板側のドアが開いて、先生が入ってきた。

いつも優しく、勉強ができない僕のことを諦めないで、分るまで教えてくれるんだ。

「だから、お散歩に行った時は、ここの椅子に戻ってきてね」

「ダメダメダメエー！ お散歩は禁止ですうっ、何処にもいかないでくださいっ」

そんな先生が泣きながら、机を合い間を駆け抜けて僕の前で立ち止る。

「小太郎君。そのお犬様を、この教室から出さないでください。体育の授業やお手洗に行く時はしょうがないですけど、それ以外はずうっとここにいて下さいっ。私もいい子にするから、許して下さいですう。じゃないと、私、お置きされちゃうのですう」

これはきつと、僕じゃなくて犬に喋りかけているんだ。

「しかし、主殿は建物内なら散歩しても良いと言ったぞい」

「だ、ただダメなんですう。お願いですから、小太郎君と一緒に行動してください」

「むう」

「そうだぞ、弟よ。ここは人界、そして我が主人は子供。子供より権力があるのは、成人を迎えた人間。この室内という限定された場所で、一番の権力者はそこにいる成人の女性だ。女性のお願いは素直に聞き入れる。それが雌にもてる雄の条件だ」

「そ、そうなんです！ だから、お犬様……」

「え？」

「おお、兄上ではないか！」

何処からか男の人の声が聞こえて、先生の行動に呆気に取られていたみんなも騒ぎ出す。

「せんせー、動物は連れてきちゃダメなんじゃないのー？」

「門間だけずりいぞ」

「え？ え？ あ、ずるくないの、門間君のこれは……」

「離れ離れになってから、あまり日数は経っておらぬが、相変わらずのようで何よりだぞい」

「ね、お兄さんってどこにいるの？」

「あそこじゃ」

犬が片方の前足を持ち上げた。手招きをしているみたくに小刻みに動かして、まるで招き猫のようだ。その前足が示す方向を、教室にいるみんなが見上げる。

「やあ、どうも。はじめまして、我らが主よ。このようなかたちで申し訳ない。出来れば、この絡みつく鎖を外してもらえないだろうか。そうしたら私も、弟のように無条件で従おう」

白いスーツを着た金髪の男の人が、天井から垂れ下っている鎖にぐるぐる巻きにされていた。

「きゃーー」

「きゃあ」

「なんだこれ!？」

「いつから？」

「こら、痛いぞ。やめないか」

どうしようっ、先生が叫びながら倒れちゃったよ。ほ、保健室に行かなくちゃ。

「先生、起きてよっ。せめて保健室で寝てください。先生つてば」
一生懸命に先生を起こしてみただけど、なかなか起きてくれない。
僕じゃ先生を連れて行けないし……。

教室もパニック状態だし、どうしたらいいの。男の子達は、お兄さんに千切った消しゴムを投げていて、女の子達は教室の隅に集まって怖がっている。

そ、そうだ。お母さんが言ってた、僕が犬の飼い主なんだって。だから、責任を持たなくちゃいけない。鎖を外して降ろしてあげなくちゃ。

あれ、でも、おかしいなあ。お兄さんって犬じゃないよね。普通の人間にしか見えないけど、なんでだろう。

「天井になんて、僕とどかないよ」

「なに心配ない。これでどうじゃ」

僕が迷っていると、犬は足と足の間に体をねじ込んだ。自然に足が開いてしまい、すこし恥かしい。

そうしている間に、犬はあっというまに巨大化した。

「うむ、これで鎖から兄上を解放できるのだぞい」

教室いっぱい急成長した犬は、誇らしげに尻尾を振った。

みんなが、お腹やおしりの下敷きになっているような気もするけど。

「す、すごいね、あははは。……お兄さん、どうやったら鎖は外せるの？」

「難しく考える事は無いぞ、我が主よ。触るだけでも簡単に外せるなにせ、少年が我らの主だからねっ」

そ、そうなんだ。

僕は言われるがままに、鎖に触った。すると、お兄さんをぐるぐるにしていた物はすうっと消えた。

お兄さんは空中で一回でんぐり返しをして床に降り立った。犬も元の大きさに戻って、その横にお座りする。

不思議な事に、巨大化した犬の下敷きになっていた先生やクラスメート達は、怪我を一つもしていないようだった。それどころか、みんなぐっすりと寝ている。

ふかふかのお腹だったのかな。ふわふわお布団みたいに気持ち良かったのかな。良いなあ。

「いやあ、召喚自体は正確なものであったのだよ。しかし我ら三兄妹、鎖で繋がれていてね。私は、ここにいる弟と妹を先に送る事に精一杯になった訳だよ。慌てて逃げ込んだ先が主殿の縁深い場所であつたが、鎖もついてきてしまつてね、はっはっは。さあ、主よ。皆が目覚まさないうちに、契約を終わらせよう。右手を出して」
なんかさっきから笑っているイメージが強い。底抜けに明るい人なのかな。

僕の右手をそつととり、手袋を脱がした。手の甲には、犬に噛まれた後に浮かんできた、丸い円の中に毛むくじやらのような模様がある。犬はそれを、綺麗な一本の線、と言っていた。

その模様を、お兄さんは一回だけ舐めた。

「これは消毒だよ。注射を打つときに、綿で消毒をするだろう？ それと同じだ」

チクリとした感触は、一瞬で終わった。

あんなに騒いでいたのだから、当然隣のクラスにもそれが伝わる。異変に気づいた両隣のクラス担任が様子を見にきた。

僕はその日、職員室で自習する事になった。

もちろん、犬とお兄さんも側にいる。お兄さんは、誰かの面倒を見るのが好きみたいで、僕は電腦空間の仕組みを教えてもらっていた。

すごく丁寧に教えてくれたんだよ。先生みたいだった。

なんでも、電腦空間には魔導力や聖導力が満ち溢れていて、精神体を重視している彼らには、とても住みやすく快適な場所だそうだ。「もちろん人間にも精神体はあるよ。けれど、他の界の者にしてみたら、赤子にも等しい稚拙な発達、という見識なんだよ。人間は、どちらかというと肉体に頼っているからね」

「僕も精神体になれるの？」

「訓練次第ではね。なれるとしたら、寝ている時だけ、かな」

お兄さんは、僕に解りやすいように、人界の習慣になぞらえて話をしてくれる。いまは言葉をさがしているみたいだ。

「ああ、これだ。幽体離脱は解るかい」

「うん」

「あれは、寝ている時に起こり易いものだよね。無意識のうちにやっているものだ。それを、意識的にやるんだよ」

「ううん、大変そう」

「まあ、人界にいる限りは必要ないと思うよ。それにね、実を言うと、私は電腦空間より、この現実が好きなんだよ。ご飯も美味しいね。だから主殿には感謝をしているのだよ。はっはっは」

お兄さんが住んでいたところで、ご飯がまずいのかな。

今度、お母さんと一緒にハンバーグを作ってあげよう。ふわふわのオムレツもいいよね。

そうだ、妹さんを見つけたらパーティーをやるう。うん、それが
良いや！

どこにいるのかな、妹さん。はやく会いたいよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0768z/>

門間家の番犬事情

2011年12月21日21時46分発行